

島根県育成野菜‘あすっこ’早生系統の窒素吸収特性

藤本順子、大野愛理

IV 摘要

島根県育成野菜‘あすっこ’早生系統の施肥基準作成に資するため、窒素吸収特性を調査した。

1. 1株当たりの新鮮重は、摘心期まで急速に増加したが、摘心期以降は、風雪害や病害などによる葉の脱落により、収穫期まで徐々に減少した。一方、乾物重は収穫終了時まで増加し続けた。
2. 葉および茎の窒素含有率は、生育が進むにつれて低下した。一方、花茎の窒素含有率は他の器官に比較し高く、収穫始期から収穫終了時までほぼ一定の値で推移した。
3. 1株当たりの窒素含有量は、摘心期まで急増した。しかし、摘心期以降は、花茎および茎の含有量が大きく増加したにもかかわらず、葉の窒素含有量が大きく減少したため、株全体の増加は緩慢となった。
4. 摘心期以降は、葉の脱落が多く、葉からの窒素の移行は少ないと思われることから、花茎の伸長と茎の肥大に必要な窒素量は、追肥によって補う必要があると考えられた。
5. 早生系統の施肥は、収量を $1.3\text{t } 10\text{a}^{-1}$ とした場合、摘心期までに窒素成分として約 $16\text{kg } 10\text{a}^{-1}$ 、摘心期以降に約 $8\text{kg } 10\text{a}^{-1}$ が吸収できるように、肥料の利用率を勘案して施用すればよいと考えられた。